

## 共通論題「地域金融の多様性と普遍性 - 新しい地域金融のモデルを求めて - 」

### 問題提起

座長 名古屋大学 家森信善

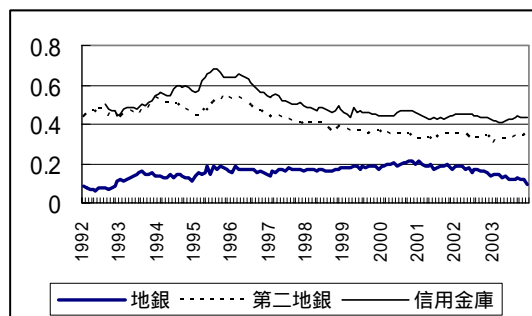
メガバンクの不良債権処理に目処が立ち、金融システム政策の関心はメガバンクから地域金融機関に移ってきたと言われている。リレーションシップバンキングの強化などの課題に多くの地域金融機関が努力しているが、来年春のペイオフ全面解禁を目前にして、経営に不安のある地域金融機関が残っているという指摘も少なくない。規制当局も様々な取り組みを行っているが、地域金融の多様性を無視して、画一的な規制や監督を課すことが望ましい結果をもたらすとは思われない。しかし、他方で、多様性を隠れ蓑にして、やらねばならない改革を先送りしている地域金融機関もあるかもしれない。

そこで、今回の共通論題では、地域金融の多様性を認めつつ、その普遍性を探るといふ問題意識で議論を行っていききたい。特に、私のような地方在住者は強く感じるのだが、各地の地域金融の情報が東京に向けては発信されているが、地域間（たとえば、東北と中部）では十分共有されていない。そうした地域間の相互比較により、地域金融の多様性と普遍性を改めて確認し、今後の地域金融のモデル（当然、普遍的な要素と地域独自の要素があるはず）を模索する機会にしたいと考えている。

たとえば、私の地元の東海地域では、貸出金利の水準が他地域に比べて低い（名古屋金利と呼ばれている）という現象が見られる（図参照）。これまで研究者による分析はあまり行われておらず、東海地域の金融システムの特異性だと片づけられることが少なくなかった。しかし、私は、名古屋金利をより普遍的な枠組みの中で考察することで、地域金融の持つ普遍的な性格も明らかにできるのではないかと考えている。

報告者の先生方からは、地域金融の多様性と言うことで、各地域の特徴（例えば、地元特有の金融現象、地元のユニークな金融機関の戦略、地元銀行の破綻の経験など）を前面に出したご報告や、逆に、普遍性と言うことで地域金融の原理的な面（たとえば、リレバンの概念検討）を中心にしたご報告などが行われる予定である。

貸出約定金利の全国と東海の格差(全国 - 東海)  
(ストック 総合) %ポイント



(数字の出所) 日本銀行名古屋支店